

海辺のランドデザイン策定のための共同研究

報告書 概要版

平成26年3月

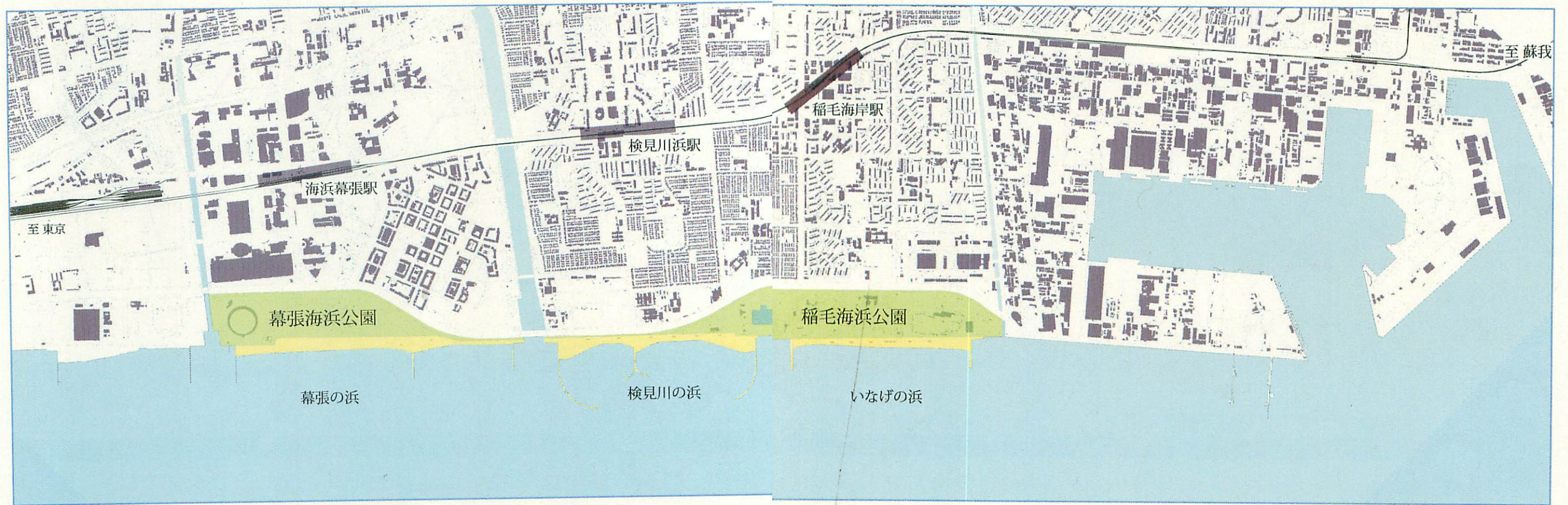
千葉市
千葉大学

稲毛海浜公園・幕張海浜公園，
いなげの浜，検見川の浜，幕張の浜のランドデザイン

20~30年後の未来の姿の創造

千葉市の北西部には東京湾に面して、いなげの浜、検見川の浜、幕張の浜の3つの人工海浜が連なり、日本一の長さを誇っています。また、これらの人工海浜に隣接して稲毛海浜公園と幕張海浜公園の2つの大規模な公園が配置されており、白砂青松の景観や富士山、東京スカイツリーをはじめ東京湾を一望できる恵まれたロケーションを有しています。しかしながら、砂浜の形態や隣接する公園の施設内容の違いに加え、各施設の管理者が異なっていることなどから、地域全域を捉えての利活用がなされておらず、そのポテンシャルを十分に活かされていない状況にあります。

この地域のもつ潜在的魅力を最大限に引き出し、賑わいを創出していくためには、長期的な将来構想を描き、それを行政、市民、企業が共有し、互いに協力して取り組んでいく必要があることから、その将来像について海辺のランドデザイン策定のための基礎調査研究を行います。



○ 稲毛・幕張海浜公園 位置図

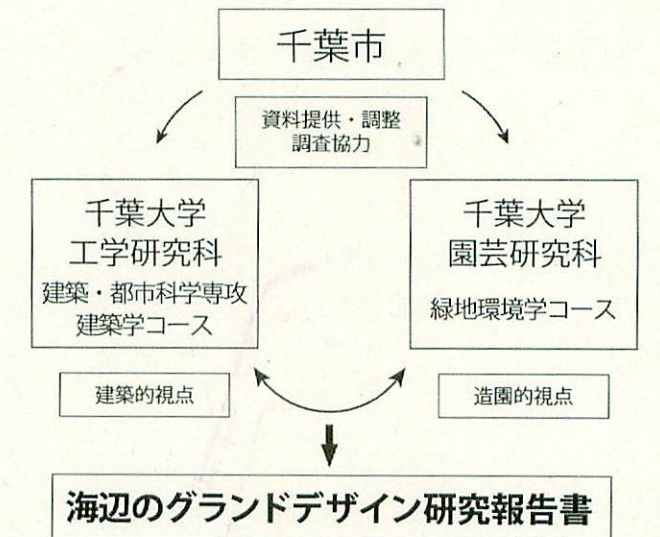
千葉市と千葉大学の共同研究

(工学研究科 建築・都市科学専攻と園芸研究科緑地環境学コースの協働)

官学協同による研究体制

千葉市とともに、千葉大学の工学研究科 建築・都市科学専攻と園芸研究科緑地環境学コースとが協働して海辺のランドデザインの策定のための基礎調査研究に取り組みました。

工学研究科では、主にニーズ発見のためのフィールドワークやワークショップの企画を担当し、建築的視点から研究に取り組み、園芸研究科では、周辺地域の歴史、水系、植栽などの調査を担当し、造園的視点から研究に取り組みました。



【テーマ】

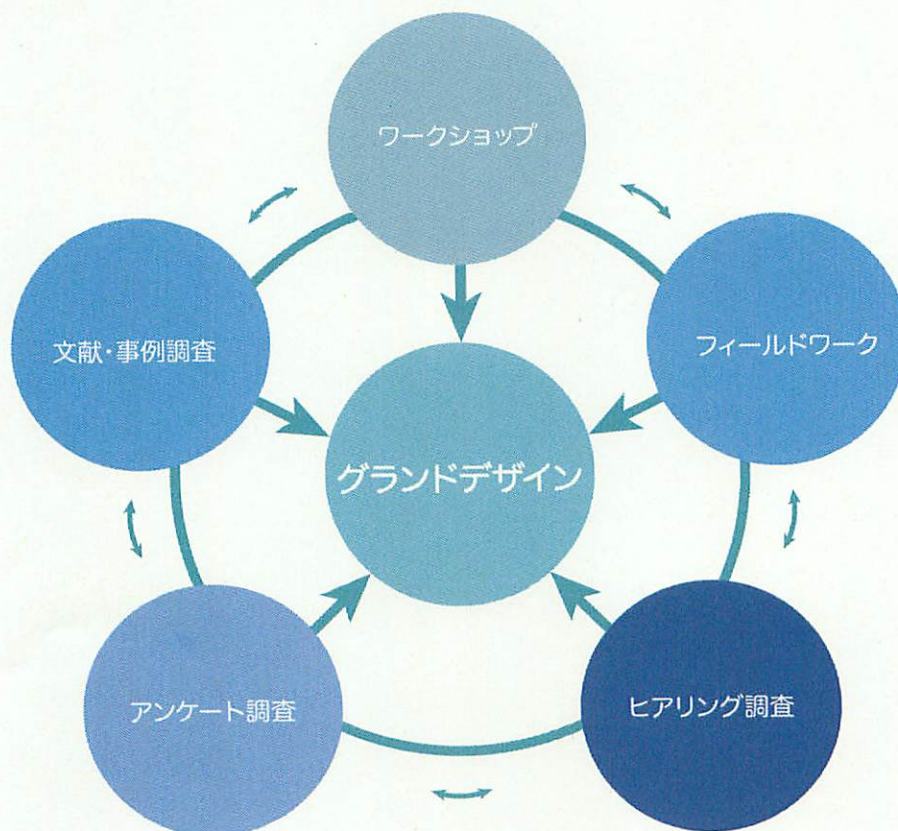
「海辺の一体利用と様々な名所づくりによるにぎわいの創出」

【方針】

快適な生活環境の形成・賑わいあふれる地域づくり

海辺の大規模な公園や人工海浜などの緑と水辺の魅力の向上

【研究実施項目】



海辺のランドデザインを策定するための要素収集として、ワークショップ、フィールドワーク、ヒアリング調査、アンケート調査、文献事例調査を実施しました。

ワークショップ

- 【第1回】 未来を担う低年齢層の想像力を
- 【第2回】 世代も分野もそれぞれに違った視点を
- 【第3回】 建築を学ぶ学生の若い創造力を



若年層から高年齢層まで異なる世代の市民を対象にし、
多様な意見を当研究に取り入れることを目的としました。

いろいろな分野・年代の人が参加して海辺をかたちづくりします

第1回ワークショップ…2013年11月16日 ～未来の稲毛・幕張海浜公園をつくろう～

【内容】

近隣の小学生と一緒に稲毛・幕張海浜公園や人工海浜の20-30年先の未来像を、模型を作りながら探っていくワークショップを行いました。現在の公園はどこがいいのか、どこが良くないのか、将来どんな公園だったらいいのか、参加者全員で考えました。小学生の素直で柔軟な発想からは、大学生も大人も目からウロコ、歓声をあげるほど素敵な将来像ができあがりました。



【成果】

現在の稲毛・幕張海浜公園の欠点として「海を感じるができない」ことが多くあげられました。海の魅力を生かすため、海辺の景観を楽しむことができる展望台や海上ホテル、海中水族館が提案されました。また、海との連続性を創造するプールから海へ繋がるウォーターライダー、海上音楽堂、QVCマリンフィールドと直接つながる船着き場など、海を活用する提案が多く出されました。

第2回ワークショップ…2013年12月15日 ～稲毛・幕張海浜公園の 将来像について考えよう～

【内容】

公募により参加した10代から70代までの幅広い世代の人が稲毛・幕張海浜公園や人工海浜の写真撮影しながら現地調査を行い、いろいろな視点で意見を交換するワークショップを行いました。それぞれに違う視点から、知っている歴史や現状の問題点や課題の他、解決のためのアイデアなど実りある議論ができました。



【成果】

砂浜をもつ海辺と緑がある豊かな自然と触れ合える場であることを評価しつつ、防砂林を含む公園内の樹木が公園の閉鎖性を生んでいることから、間伐により公園内の回遊性を高めることや、樹種の変更により四季を感じさせ生態系を豊かにする提案などが出されました。また、統一されたサイン計画や近年増えているコスプレによる賑わい、冬ならではのプールの風景の活用など、改善や推進に関する様々な提案が出されました。

第3回ワークショップ…2014年1月22日 ～千葉市の海辺の魅力アップに寄与する 地域の文化施設についての提案～

【内容】

千葉大学の建築学科の学生が取り組んだ、千葉市の海辺の魅力アップする文化施設として「海の博物館」を題材にした設計課題の発表会を第一部に行い、第二部では学生、市民の方、教授陣とを交えた意見交換をする構成でワークショップを行いました。

博物館への建築的視点から始まり、海辺と隣接する住宅地、都市計画、海辺の利用者の活動にまで幅広く話が及びました。



【成果】

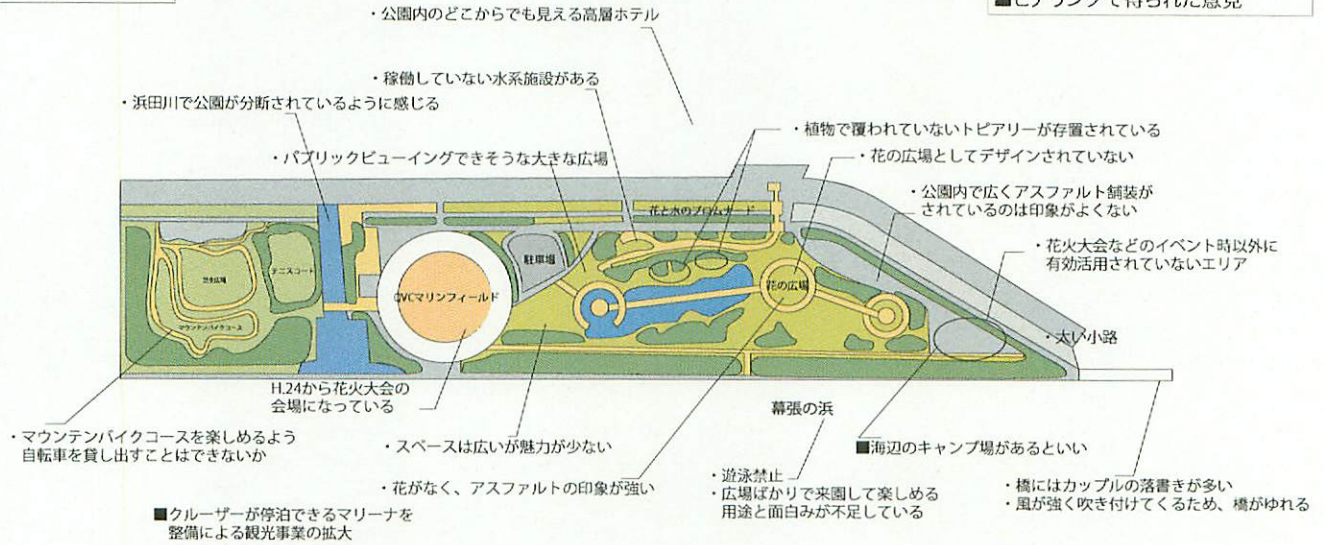
稲毛海浜公園内の芝生広場に文化施設として「海の博物館」を建築設計した作品12点を発表し、意見交換することで議論を深めました。建築物としてだけでなく、海や後背地や周辺環境を含め、幅広い視点でディスカッションが繰り返されました。

フィールドワーク・ヒアリング調査

賑わいが生まれる海辺の創出という視点で調査することで、公園の良い点も問題もたくさん見えてきました。看板やサインはわかりやすいか、自動販売機や売店は足りているか、園路は通りやすいかなど、地図に描き込みながら現地調査を実施しました。また、公園や浜でボランティアなどの活動をしている団体へのヒアリング調査を行いました。

幕張海浜公園

・フィールドワークで得られた発見
■ヒアリングで得られた意見



稲毛海浜公園



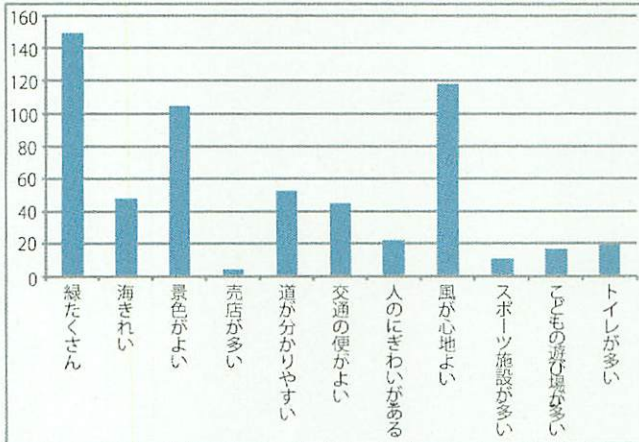
アンケート調査

公園利用者にアンケート調査を行い、公園を訪れた目的、公園の良いところや改善したいところなどを調べました。散歩目的の利用が非常に多かったことから、地域住民の生活のなかで公園が身近な存在だとわかりました。緑の多さと風の心地よさ、景色の良さが良いところとして多くみられました。

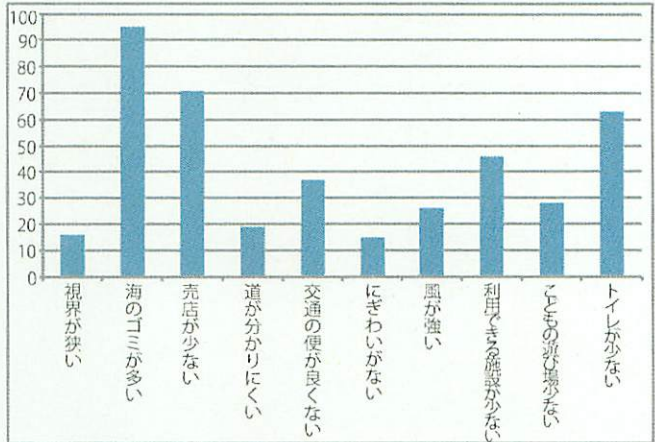
一方、海のゴミの多さ、売店とトイレの少なさが改善したいところの意見として多くみられました。

(配布総数：307件) N=回答人数

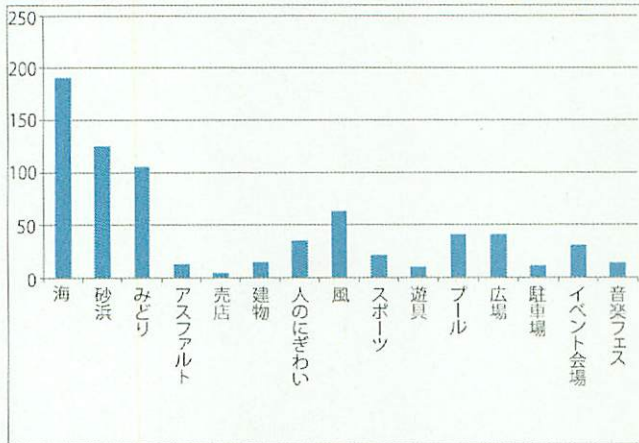
良いところ N=303 (複数回答可)



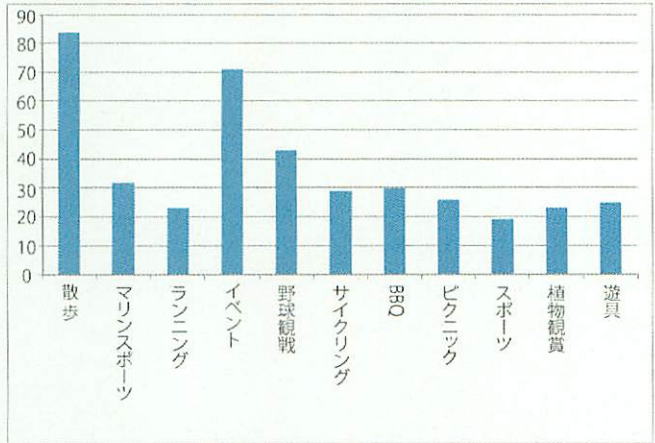
改善したいところ N=300 (複数回答可)



公園の印象 N=297 (複数回答可)



以前までに公園を訪れた目的 N=277 (複数回答可)



文献・事例調査

稲毛、検見川、幕張の歴史や埋め立ての変遷などについて、まちづくり関連の文献、公園計画の文献から調査しました。さらに他地域の海辺の参考事例の調査を行い、ランドデザインの足がかりとなる要素を抽出しました。

歴史関連の文献からは、後背地の歴史軸の重要性、稲毛、検見川、幕張が歴史の偉人をも虜にする魅力ある海辺であったことがわかりました。

公園の参考事例調査では、海辺以外でも内陸の公園や運動公園など広く対象をとって調査をしました。園内の施設の配置や規模、園路の通し方や植栽計画などを学ぶことができました。



海と緑の街
磯辺街づくり研究会 著

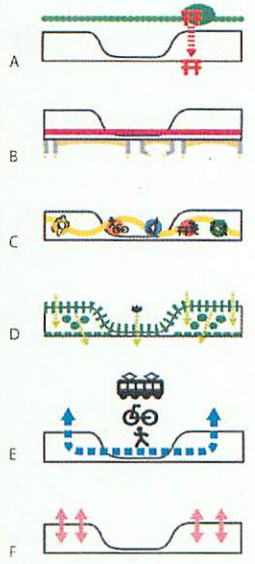


長崎水辺の森公園での調査風景

4. デザインのポイント

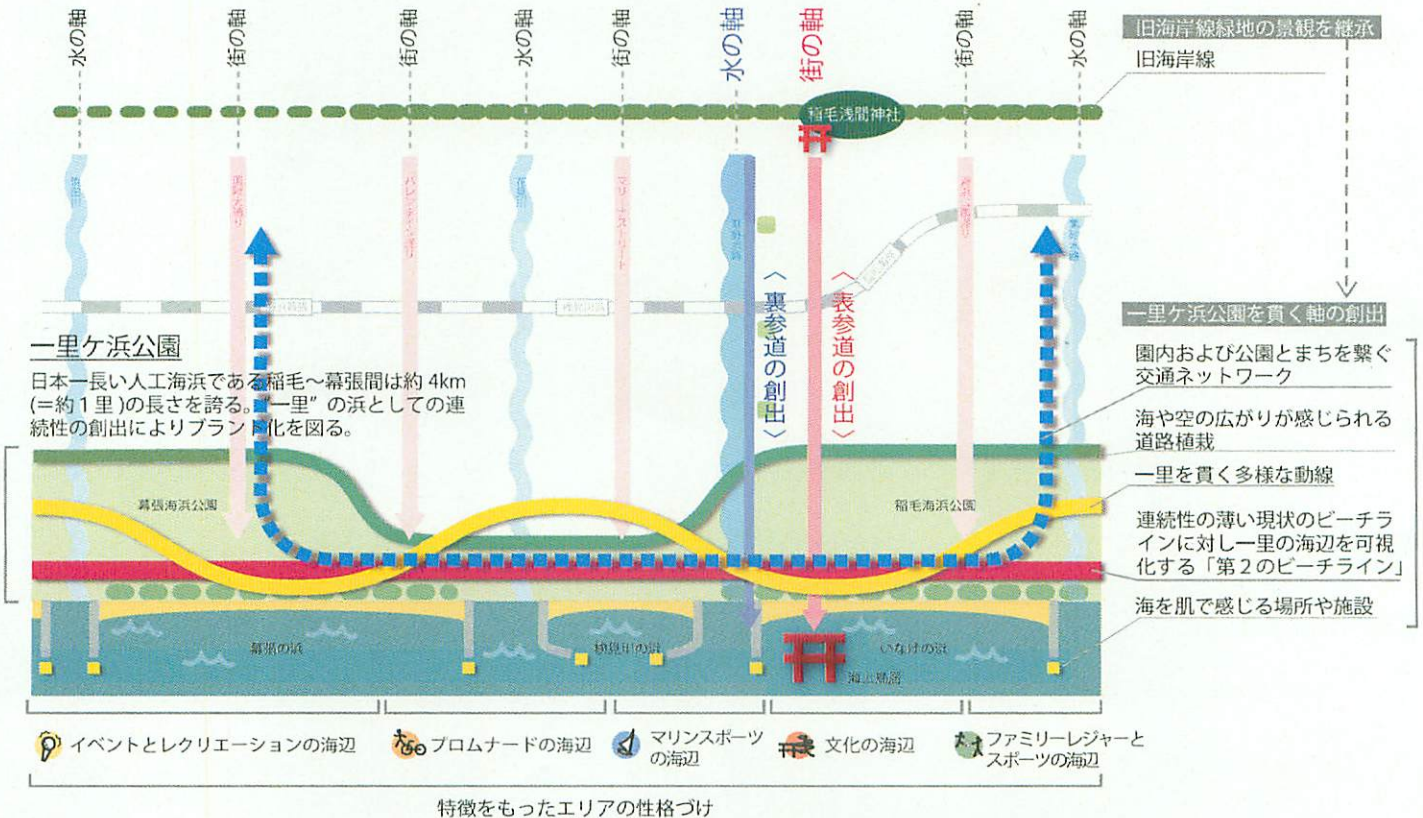
調査からわかった魅力ある公園づくりへのキーポイント

リサーチ軸	具体的項目	リサーチからの主な課題	必要とされるアプローチ
文化	A 歴史	・旧海岸の歴史の継承 ・歴史的文化遺産と新海岸との関係の構築	→ 歴史の可視化と旧海岸・新海岸の関係のストーリー化
	B 風景	・対岸の富士山を臨む魅力ある場の創造 ・人の営みのある海辺風景のデザイン	→ 連続性の薄い現状のビーチラインに対し、一里の海浜を可視化する「第2のビーチライン」の創出、見通しを活かした風景づくり
自然	C 海岸	・海岸利用を誘発する仕組みの創出 ・海岸と公園、まちとの一体的利用の促進	→ 海岸と公園とが連続し、砂浜を利用したイベントを行うなどの海辺を一体的に活用する公園計画、海を肌で感じられる場所づくり
	D 植栽	・街路樹を含めた樹種の選定 ・海や空の広がりを感じられる植栽配置	→ 海辺にふさわしいつながりのある緑の景観、海への見通しを確保した防風林の創出
まち	E 交通	・交通ネットワークの充実 ・公園内の動線の明快化	→ 公園全体を繋ぎ、後背地と繋がる交通ネットワークの導入、明快な動線計画
	F 周辺	・海と連続したまちづくりの推進 ・河川と水路沿いの景観整備の推進	→ 後背地の道路沿いや河川・水路沿いに、海との回遊性を高めるデザインの導入



ランドデザインのコンセプト

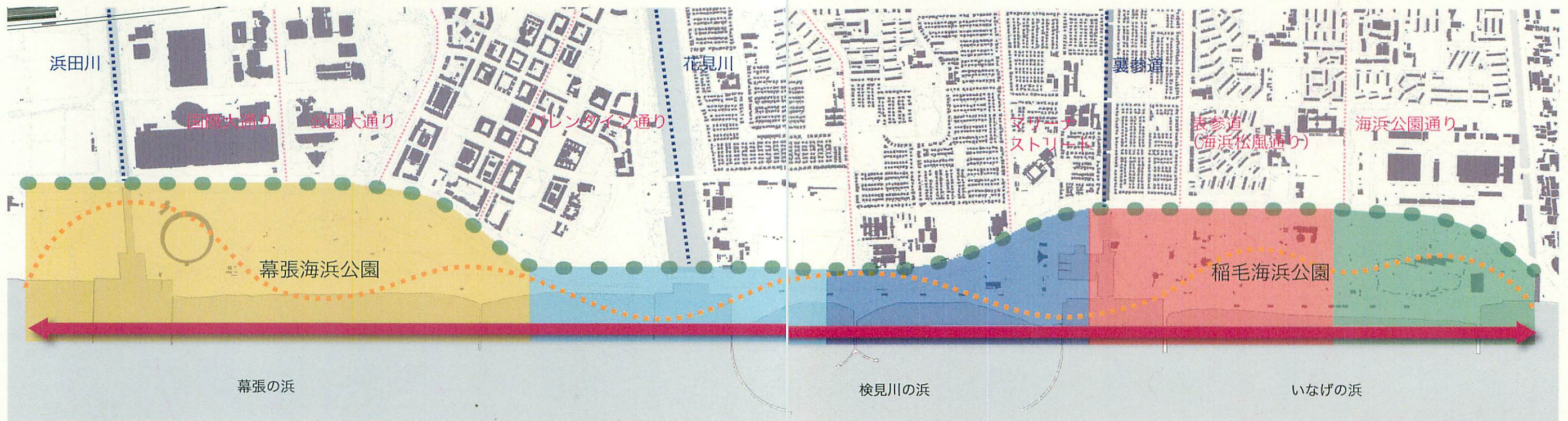
「一里」を貫く海辺の風景
 ~ 人の営みを感じられる個性的な名所 ~



広く海に面している特性を活かして



性格の異なる5つの海辺をつくる



●●●●● 海や空の広がりを感じられる道路植栽 ■■■■■ 一里の海辺を可視化する第2のビーチライン ○○○○○ 公園の連続性を創出する園路計画 まちの軸（河川・水路） 街の軸（道路）

イベントとレクリエーションの海辺

QVCマリンフィールドや幕張メッセなど、幕張新都心で行われる活動が広がるエリア。QVCマリンフィールドを中心に、幅広く市民が利用出来る多様な施設と、常時でもイベント開催時でも、多目的に利用される広場を設け、スポーツやイベント、さらにはニュースポーツと言われるような新たなレクリエーションの行われる場とする。イベント時の連携利用や幕張新都心の様々な人々の日常利用のため、まちと公園、まちと海浜のアクセシビリティを高めた計画をする。

プロムナードの海辺

一里の浜の連続性を担い、稲毛海浜公園と幕張海浜公園をつなぐ架け橋となるエリア。公園をつなぐだけでなく花見川とも接続し、まちと公園、海とを結ぶ。様々な人の動きや交流の結節点となる活気ある散歩道=プロムナードを形成する。

マリンスポーツの海辺

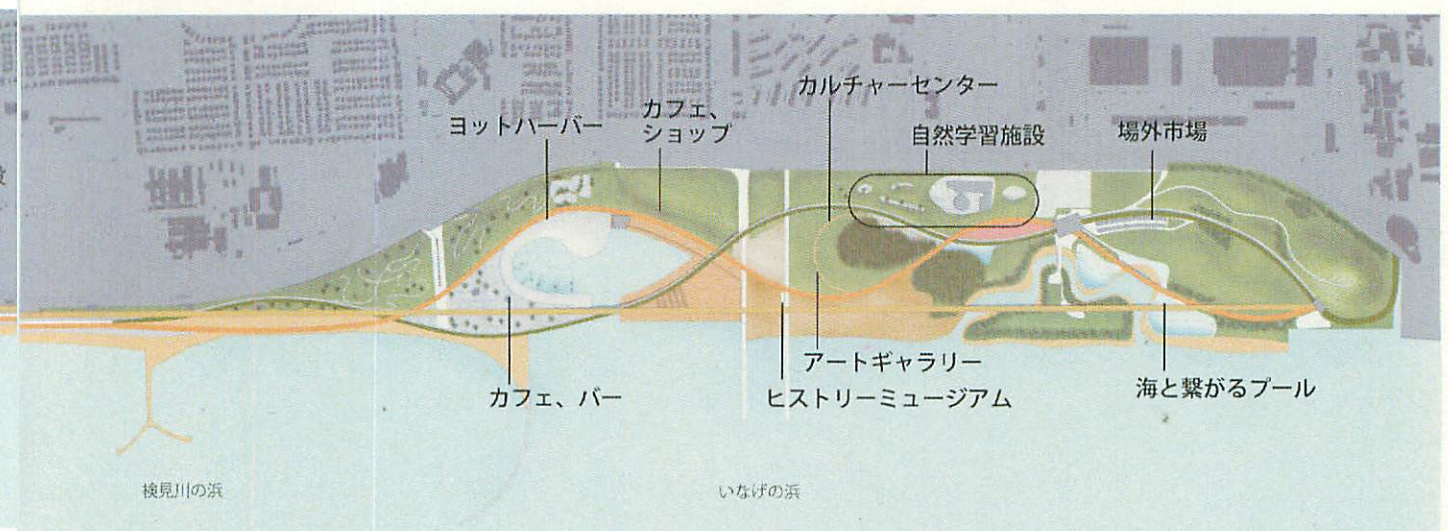
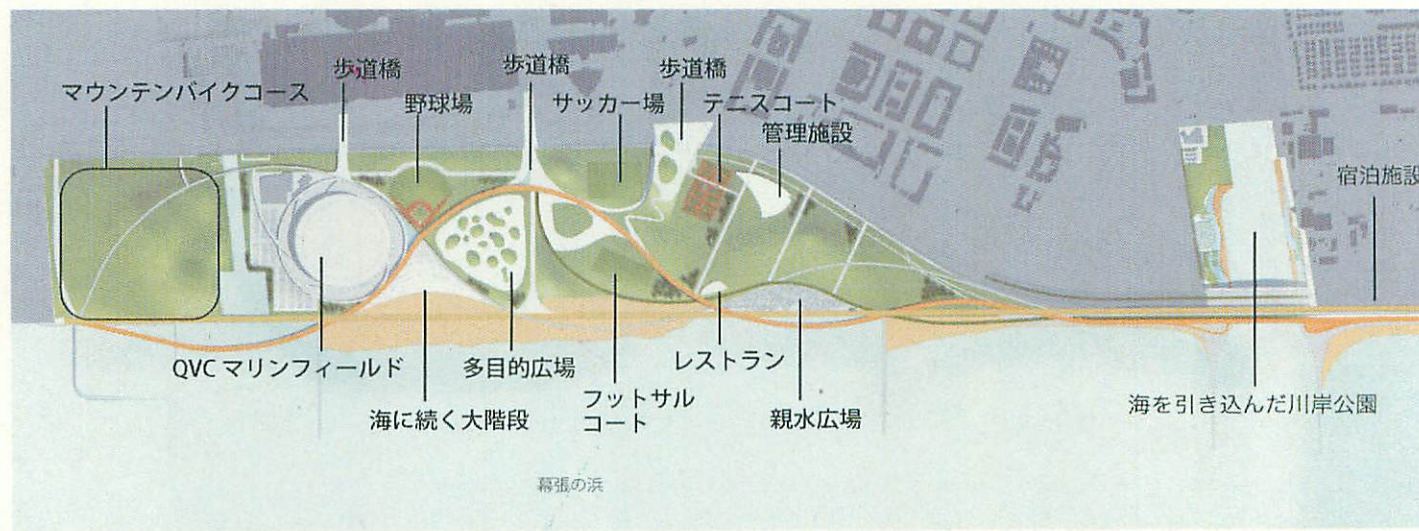
ヨットやウィンドサーフィンなどの遊戯と拠点施設を、この公園のひとつの風景として位置づける。マリンスポーツを行う利用者を支援する施設とともに、マリンスポーツが行われている海浜風景を眺められるシーサイドレストランなどの場を設け、様々な人が訪れて楽しめるエリアを計画する。

文化の海辺

旧海岸沿いの歴史文化を継承しつつ、三陽メディアフラワーミュージアムを活用した自然に関わる文化を振興するエリア。田山花袋をはじめ、多くの文人が散った旧海岸の豊かな自然や風景を現在に呼び覚まし、歴史や自然について体感し学べる場を提供する。

ファミリーレジャーとスポーツの海辺

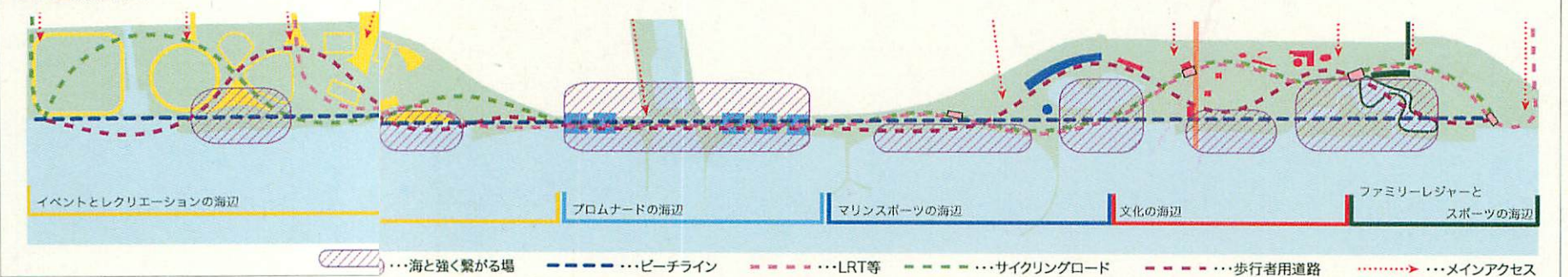
稲毛海浜公園プールを活かし、海と連続した魅力的な遊泳施設を創出する。さらに、中央卸売市場と連携した「食」にまつわる施設など、多様なレジャー施設を計画する。また球技などのスポーツを行う施設を設け、家族で楽しみ憩える場を生み出すことを目指す。



■ アプローチ -- 風景・海岸・交通の3つの項目に重点を置いた

ケーススタディ I では、エリア計画から性格付けした5つの海辺をもとに、やや細かく性格づけを行い、5つの特色を帯びた海辺で、全体を構成する。
現状、水路や舗装の違いなどにより一体感の薄い4.3kmのビーチラインに対し、「第2のビーチライン」を創出する。この第2のビーチラインは、人工海浜の誇る「日本一の長さ=一里」を顕在化するとともに、その海浜で行われる多様なアクティビティを活性化させる。
また、公園を貫く主要な動線として、歩行者道、サイクリングロード、LRT(Light Rail Transit...次世代型の路面電車)や連節バス等を通す。これらの動線は海岸と水平方向に公園を結ぶだけでなく、まちとつながり、後背地にある鉄道などの動線と連携する。さらに、これらの動線に沿って、様々な施設を配置していく事で、後背地の各種施設と公園をも結びつけ、公園に多様な利用形態を生み出していく。

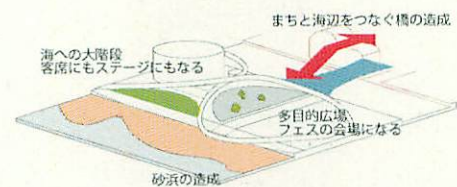
■ 全体計画



■ 5つの海辺の特徴

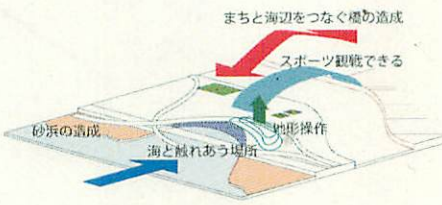
イベントとレクリエーションの海辺 (西側)

QVC マリンフィールドを中心にイベントとスポーツ施設が集約したエリア。QVC マリンフィールドに求心力を持たせるように、いくつかの動線がつながり、その沿道にサッカー場や野球場を配置した。またQVC マリンフィールドは、地域住民に開放するプログラムを組み込み市民に身近な場所とする。



イベントとレクリエーションの海辺 (東側)

海岸沿いに海と公園をつなぐ親水空間を設ける。子供の遊び場としても計画すると同時に、富士山が見える方向に配置軸線を取り、そのまま広場とつながる計画をする。夕日が落ちる頃、富士山が美しい陰影をもって現れ、若いカップルもお年寄りも誰もが集う憩いの場となるエリアである。



プロムナードの海辺

稲毛・幕張海浜公園の両公園をつなぐ大きな橋では、後背地をつなぐ道路や河川・水路と公園へ行き交う人の動線機能が両立する。構造体の間に商業施設などの市民に有用な施設を配置し、東京湾を臨む展望スペースとしても利用される。また後背地から延びる花見川と浜の接続点として人が多く行き交うエリアである。



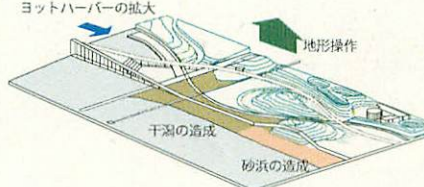
マリンスポーツの海辺

既存のヨットハーバーを拡張し、新しいマリンスポーツの中心施設を伴った風景を提案する。ヨットハーバーは、後背地に向けて開いた入り江のような形状から、マリンスポーツをする人だけの場所ではなく、公園を訪れるすべての人が集い、ここにしかないマリンスポーツの風景を眺めることもできるエリアである。



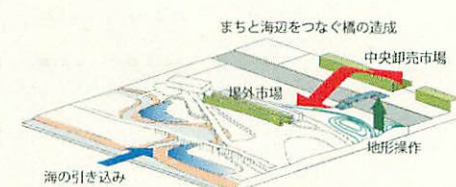
文化の海辺

稲毛浅間神社からの軸線を海につながるように公園に取り込み、軸線に沿った位置に歴史ミュージアムを設ける。また、既存の三陽メディアフラワーミュージアムに併設して波や風の音を感じるギャラリーを置くことで、公園の四季を感じることができる。ここは歴史や自然に関連して文化を学べるエリアとする。

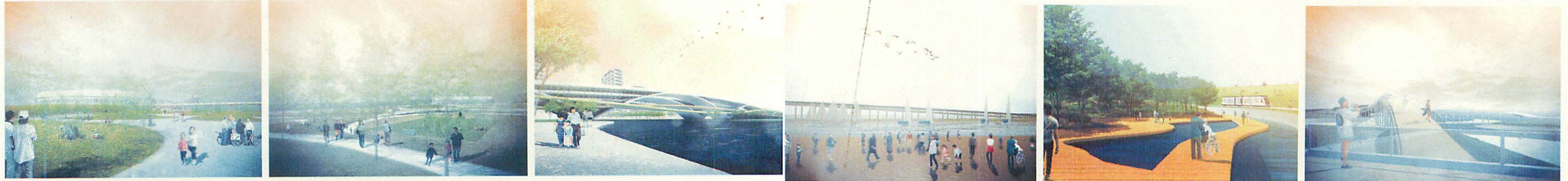


ファミリーレジャーとスポーツの海辺

稲毛海浜公園プールを中心として動線を計画し、プールと海が一体となるようにインナービーチをつくり、子供から大人まで楽しめる場所をつくる。また、後背地をつなぐために千葉市中央卸売市場から出張できる場外市場を公園内に設け、千葉の「食」の魅力を発信するエリアとしても計画する。



■ 海辺の様子

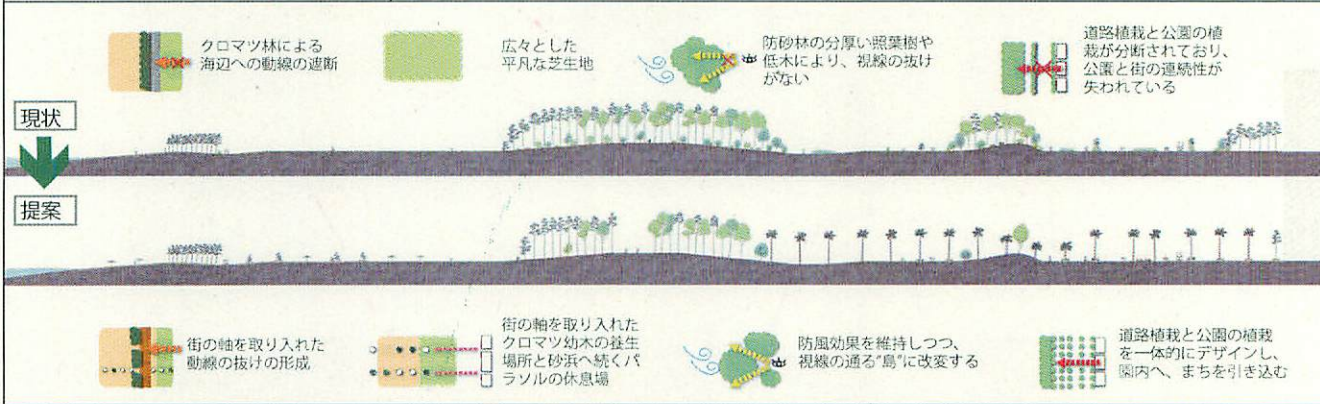


■アプローチ --歴史・風景・植栽・周辺の4つの項目に重点を置いた

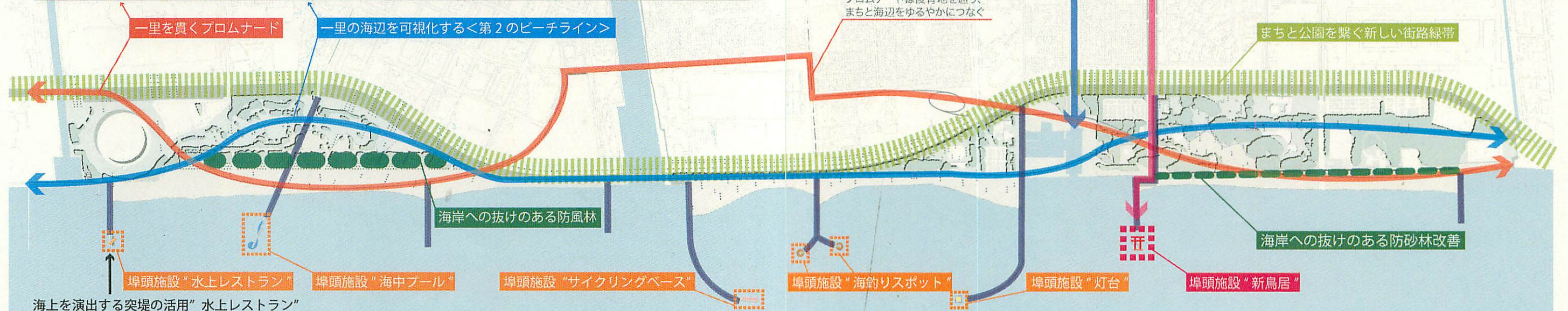
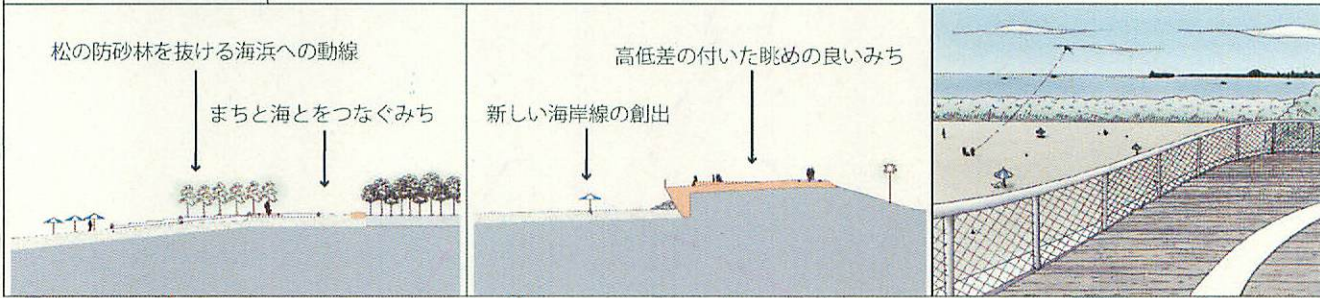
- ・<稲毛浅間神社の緑地(昔の海浜)>と<“一里ヶ浜”公園(新しい海浜)>を同時によみがえらせる。
- ・まちと海をつなぐ表参道・裏参道による後背地まで含めた海辺の活性化をはかる。

ケーススタディ II では後背地のまちも含め大きな範囲を対象とし、海辺らしい風景を再構成するアプローチをとります。まず稲毛浅間神社のある旧海岸線から埋め立てによってできた新海岸線までの縦軸と、3つの浜にまたがる一里の横軸とに分け、これら縦軸と横軸が絡み合う場所として公園をデザインします。風景の再構成をするにあたり、水路や道路を含めて既存の施設を活かし、必要最小限の要素を挿入することで、まちや公園がもつポテンシャルを引き出します。

まち、公園、海をつなぐ植栽計画



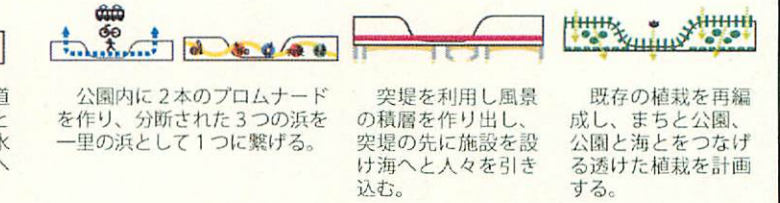
一里を貫く新たな動線



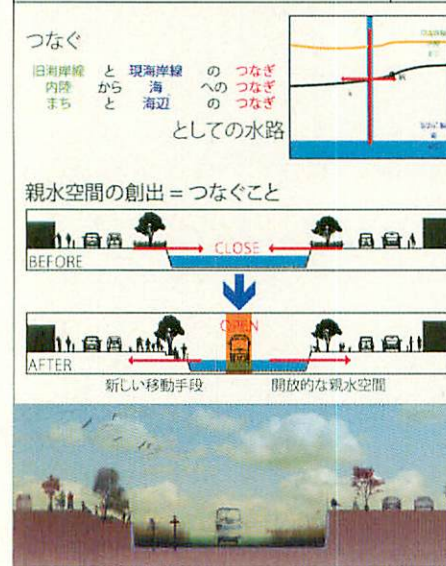
■縦軸のアプローチ



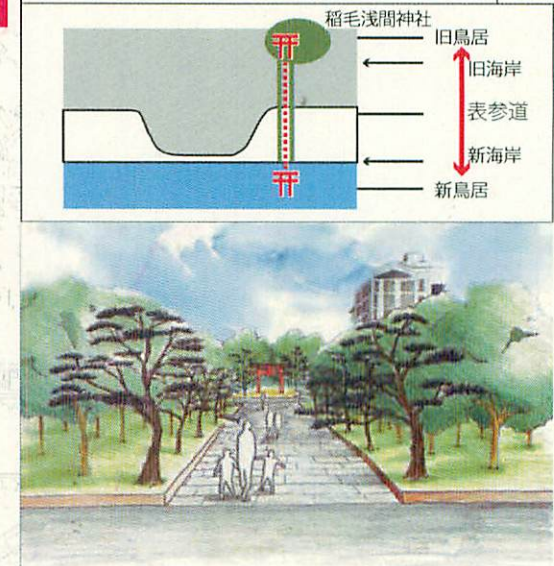
■横軸のアプローチ



親水空間による<裏参道>の創出



稲毛浅間神社から海への<表参道>の創出



「海辺のランドデザイン」の実現に向けて

(1) 海辺のランドデザインの策定

本研究では、海辺のランドデザイン策定のための基礎調査を実施して参りました。

本研究の成果を踏まえて、具体的な活性化方策について更なる検討を行い、今後、海辺のランドデザインを策定していきます。

(2) 民間活力の活用

地方公共団体の財政状況は引き続き厳しく、現在の社会情勢下において、自治体だけですべての事業を実施することは難しい状況です。

また、公園を活性化するためには、民間の資本と豊富な経営ノウハウを活用した施設の整備・運営が求められていることから、公園の活性化事業に民間企業が参加しやすい環境づくりを進めて、企業の進出意欲を高めるなどして、積極的に民間活力を活用していきます。

(3) 地元住民や利用者に対する継続的な調査

市民・団体企業等と行政が、目指すべき姿の具体的なイメージを共有するため、地元住民や利用者等のニーズを的確に把握する調査等を継続的に実施していきます。

(4) 各施設の管理者との持続的な協議

3つの人工海浜（いなげの浜、検見川の浜、幕張の浜）とそれに隣接する2つの海浜公園（稲毛海浜公園、幕張海浜公園）は、施設の設置・管理者が異なるとともに、公園と港湾では、所管する法令も異なります。

しかしながら、これらを一体的に考えなければ、幕張～稲毛の海辺の活性化は図れないことから、各施設の設置・管理者と情報を共有するとともに、持続的に協議を進めていきます。

千葉市都市局公園緑地部緑政課

千葉大学大学院工学研究科 建築・都市科学専攻 建築学コース 岡田哲史研究室(岡田哲史 准教授)

千葉大学大学院園芸学研究科緑地環境学コース 庭園デザイン学研究室 (三谷徹 教授)

千葉大学工学部建築学科 伊藤潤一 助教